

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19202008
 研究課題名（和文） 東アジア古典学としての上代文学の構築
 研究課題名（英文） JODAI-BUNGAKU in East Asian Classics
 研究代表者
 神野志 隆光（KOHNOSHI TAKAMITSU）
 東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授
 研究者番号：60018900

研究成果の概要（和文）：

本プロジェクトは各国文学のパラダイムを脱却し、歴史的実態に即した上代文学研究の新たな枠組みを「東アジア古典学」として提起しその具体化を試みた。国内外の研究者と連携し、古代の文字使用の実態、類書・幼学書の活用、文選の受容、万葉集の捉え直し等、共同研究によって新たな知見を獲得した。そうした研究と相乗的に、新たな枠組みを活かした教育プログラムの構築をも推進した。主な成果は『東アジア古典学のために 2007-2010』にまとめられている。

研究成果の概要（英文）：

The aim of our project was to reorient the conventional paradigm of national literature, and establish a new framework of ancient literature studies as "East Asian Classical Studies." We were successful in producing new academic achievements in such fields as the use of Chinese characters in ancient Japan, utilization of encyclopedias and primers, reception of the *Wen Xuan*, and review of the *Man'yoshu*, by cooperating with scholars both within the country and abroad. In a close correlation with the academic studies, we also promoted the construction of the original educational program based on our newly formed academic framework. Main accomplishments are included in our official report *Reorienting East Asian Classical Studies 2007-2010*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
2009年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
2010年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
年度			
総計	30,600,000	9,180,000	39,780,000

研究分野：国文学・日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学・古代文学・漢文学

1. 研究開始当初の背景

上代とよびならわされる、奈良王朝（7～9世紀を範囲として考えたい）の漢文漢字文献にかかわる古典（古事記・日本書紀・万葉

集等）研究と教育はこのままでは衰滅しかねない危機的状況にあると見なした。漢文漢字に関する学力低下から、漢字で書かれたものが忌避される傾向が大学院のレベルにま

で及び、研究者養成をも阻害している、ひいてはそれが大学における教員の学力低下にもつながり悪循環のなかに事態は進行していると判断された。

研究状況としては、古代東アジアが共通の文字（漢字）、共通の文章語（漢文）により、教養の基盤と価値観とを共有する文化世界として成り立つものとしてあったことが明確になってきた。日本列島でも固有の文明をもちつつ、文字の世界においては、一つの文化世界につながってであろうとする営みがあった。そうした歴史的事実に対して、民族文化・国民文化的に各国の古典文学として見る19世紀以来のパラダイムはすでに有効ではないと判断された。東アジア全体を漢字世界としてとらえ、その中に文学研究を再定位することが、日本上代文学研究（さらには、中国古代文学研究、朝鮮古代文学研究）の発展形として求められるべき状況にあった。

この観点から顧みたま時、上記の研究・教育の危機もまた、従来の各国文学的発想の帰結でもあったと考えられ、そうした発想をとりはらう、東アジア古典世界への視点を明確にすることは、研究において求められるべき刷新であるだけでなく、教育の危機的状況を根本において打破するものにつながると判断した。

研究代表者神野志を中心とした「東アジア古典学のために」と題した連続研究会、神野志、研究分担者齋藤による東京大学教養学部における「古典日本語の世界」と題した授業はいずれも上記の問題意識の具体化をめざした。その成果として神野志・齋藤他『古典日本語の世界』（東京大学出版会）、神野志『漢字テキストとしての古事記』（同）も刊行した。

また神野志は公開授業を行なうなど、漢字世界を基盤とする新たなビジョンに基づく古典文学の教育プログラムを模索した。

2. 研究の目的

共通の文字（漢字）文章語（漢文）により、教養の基盤と価値観とを共有する一つの漢字世界と、固有の文明をもちつつ漢字世界につながってであろうとする日本列島における営みという古代の歴史的事実性に即した、上代文学研究の新たな枠組みを、従来の文学研究の発展形として具体化すること。

こうした問題意識に照応した教育プログラムの構築をもう一つの目標とした。いわば研究と教育の相互作用のうちに、新たな研究の具体化をはかったのである。この教育プログラムは、視野を新たにするだけでなく、それを自らの研究の基礎とするための文献操作と分析にかかわる基本技術の修得をふくんだ実践的なものでなければならない。文学研究の新たな枠組みの具体化の一環とする

とともに、現状の教育的危機を打破することをめざした。

また、以上の取り組みを、可能なかぎり国内外に開かれたかたちで具体化することによって、東アジア古典学としての日本文学研究という新たなあり方を、東アジアだけでなく、国際的な日本文学研究へ発信することをめざした。欧米での日本研究の現状に対する具体性のある問題提起でありたいと考えた。

3. 研究の方法

東京大学教養学部国文学漢文学部会の協力を得て、同部会研究室に共同研究の拠点置き、研究プロジェクトの全体を統括した（運営のために研究支援者1名を雇用）。共同研究会の設計のみならず、この研究を遂行するのに不可欠な国内外の研究ネットワークの創出と維持、情報交換の集約点として共同研究の全期間を通じて機能した。

第一に、「セミナー・東アジア古典学のために」としてすすめてきた、日本上代文学研究の諸問題の捉え直しにかかわる研究発表と討議の場を発展させ、共同研究会を開催し、「東アジア古典学」構想を具体化させるべく、研究分担者を軸に、多様な研究者を招く集中的な討議の場とした。さらに広汎な研究ネットワークの形成とともに、海外もふくめた各地でセミナーやシンポジウムを開き、具体的な論点をめぐる討議を重ねた。

第二に、アカデミック・スキルの習得を軸とする、共通教育プログラム案の作成を具体化した。シラバスの詳細や基礎研究の技法の検討、教材に関する討議などをすすめる一方、各地での公開授業、授業のDVD撮影などを行い、教育実践に関する共同討議をも実施した。

第三に、本教育プログラムを国際的に発信しうるものとするため、中国、韓国の各国古典文学研究者、さらに米国の日本古典文学研究者との協力関係をつくり、教育実践や共同討議を行った。

また第四に、東アジア古典学という観点に基づく教育プログラムを実現するため、レファレンスを中心とした関連文献の体系的な整備を行なった。

共同研究の成果は、報告書として『東アジア古典学のために 2007-2010』にまとめた。

4. 研究成果

(1)「セミナー・東アジア古典学のために」と題した一連の共同研究会を東京大で開催してきた。（所属は開催時のものである）東アジア古典学を構成する具体的な論点をとり上げ、多角的な論議を行なった。海外の研究者も積極的に招聘し、韓国で出土した文字資料の状況など、新しい研究状況をも踏まえつつ考察をすすめた。

①『『古典日本語の世界—漢字がつくる日本』第一部について』(鉄野昌弘・東京女子大、神野志)平成19年6月23日。

②「韓国古代木簡の現在」(三上喜孝・山形大)同年12月8日。

③「類書をつかいこなすために—芸文類聚と初学記から」(齋藤)平成20年1月26日。

④「いま人麻呂歌集を考える」(毛利正守・武庫川女子大、神野志、身崎)同年6月7日。

⑤「中華世界秩序原理の起源—先秦時代の古典文化価値」(張啓雄・中央研究院(台湾)、伊東貴之・武蔵大)平成21年4月11日。

⑥「愛民詩と訓民歌—二重言語時代における士大夫詩歌の対民観」(金時艷・成均館大(韓国))同年6月4日。

⑦「孝子伝図と列女伝図について」(黒田彰・佛教大)同年10月17日。

⑧「神野志隆光『変奏される日本書紀』『本居宣長『古事記伝』を読む』合評会」(米谷匡史・東京外語大、金沢英之・札幌大)平成22年3月20日。

⑨「欧米における漢文教育」(Haruo SHIRANE、David LURIE・コロンビア大)同年6月8日。

⑩「百済の仏教と文字」(李鎔賢・国立中央博物館(韓国))同年7月17日。

⑪「古代東アジア文学の基盤考察」(金采洙・高麗大)同年11月12日。

(2)以下のような集中講義・実験授業を国内外で開催・共催した。最新の研究状況をふまえた教育実践・内容の検討、また国際的な環境での教育プログラムの実践とフィードバックを経験し、研究と教育の相乗作用を活かし、また教育プログラムの国際的な発信力に自信を深めることができた。

①集中講義「7～8世紀の列島の文字世界」(乾善彦・大阪府立大)平成19年9月3～4日、東京大。

②シンポジウムと若手研究者支援プログラム「特別講義:関連分野の学び方」(内田ほか3名)「発表:韓国木簡の現在」(李成市・早稲田大、李鎔賢・国立扶余博物館(韓国)、三上喜孝、館野和己・奈良女子大、神野志)平成20年8月9～10日、奈良県立万葉文化館。奈良女子大COE「古代日本形成の特質解明」・奈良県立万葉文化館との共催。

③ワークショップ「教養の基盤—類書を学び、類書で学ぶ」(齋藤、神野志、司会: David LURIE)同年10月3日、コロンビア大。同大学大学院東アジア言語文化学部との共催。

④日本漢文学特別講義「漢籍の受容—『文選』の場合」(身崎、小助川貞次・富山大、廣川晶輝・甲南大ほか)同年11月5・8日、北海道大。北海道大学大学院文学研究科との共催。

⑤セミナー「東アジア古典世界を考える」(神野志、内田、身崎、徳盛、他)同年12月12日、成均館大。成均館大学東アジア学院との共催。

⑥ワークショップ「東アジア古典世界:教養の基盤と教育プログラム」(徳盛、神野志、齋藤、他)平成21年4月17日、ブリティッシュコロンビア大(カナダ)、同年4月20日、カリフォルニア大ロサンゼルス校。UCLAテラサキ日本研究センターとの共催。

⑦集中講義「上代日本文学」(内田、毛利正守、松尾良樹・奈良女子大、齋藤、坂本信幸・奈良女子大、徳盛)同年9月14～17・21～22日、中国・南京大。奈良女子大国際交流センターとの共催。

(3)以上と並行して、米、加、中、台、韓国の研究者と連携した研究会・シンポジウムも行った。「東アジア古典学」構想に集約される問題意識について、国際的に討議する場をもちえたことは、その具体化にきわめて有意義であった。

①2007韓日国際学術会議「東アジアの古典学としての韓国の古典世界」(神野志、身崎、内田、柳浚弼・成均館大、権仁瀚・成均館大)平成19年9月29日、成均館大。

②研究会「東アジア古典世界の教養基盤」(齋藤、神野志、徳盛、Karen THORNBERRY・ハーヴァード大、Edward KAMENS・エール大、他)平成20年9月27日、ハーヴァード・イェンチン研究所。同研究所との共催。

③国際シンポジウム「東アジアの地域交流」(徳盛、齋藤、神野志、内田、身崎他)平成21年12月18日、中央研究院(台湾)。同研究院、台湾大学日本語文学系・交流協会などとの共催。

(4)これらの成果については、日英中韓4ヶ国語によるホームページを構築・運営し、常に最新の情報を発信してきた(<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/eastasiasia/>)。また連携する授業を撮影、DVD化してベトナム国立大ハノイ校に提供するなど、国際的な発信をも試みた。最終年度には、これまでのセミナー・集中講義等の成果をまとめた報告書『東アジア古典学のために』を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計51件)

①齋藤希史、『『虞美人草』——修辞の彼方』、『叙説』、査読有、第38巻、2011年、96-109頁。

②徳盛誠、「日本書紀「神代」試論——イザナキ・イザナミによる構成と保障」、『思想』、査読有、第1043巻、2011年、76-99頁。

③齋藤希史、「文体と思考の自由——福澤諭吉の射程」、『福澤諭吉年鑑』、査読無、第37巻、2010年、75-92頁。

④内田賢徳、「「目一つの鬼」という潤色——出雲国風土記述作の一面」、『風土記研究』、

査読有、第34巻、2010年、1-15頁。

⑤神野志隆光、「歴史」としての『万葉集』——『万葉集』のテキスト理解のために、『国語と国文学』、査読有、第87巻11号、2010年、1-14頁。

⑥齋藤希史、「悠然」の時空——陶淵明にいたるまで、『未名』、査読有、第28巻、2010年、1-22頁。

⑦齋藤希史、「漢字圏としての東アジア」、『大航海』、査読無、第66号、2008年、77-85頁。

〔学会発表〕(計20件)

①齋藤希史、景観の日本——志賀重昂『日本風景論』から、超域文化科学フォーラム・日台交流シンポジウム「日本を見る視線」、2011年1月8日、東京大学駒場キャンパス。

②神野志隆光、漢字世界と地域的固有性、国際学術大会「文学史の近代、古典の近代」、2010年10月5日、韓国・成均館大学比較文化研究所。

③徳盛誠、Changing Consciousness of Shared Classical World: Through History of Interpretations of *Nihon Shoki*、International Comparative Literature Association Congress 2010、2010年8月20日、韓国・中央大学校。

④徳盛誠、問題としての東アジア古典世界、国際シンポジウム「東アジアの地域交流」、2009年12月18日、台湾・国立中央研究院近代史研究所。

⑤神野志隆光、Rethinking the Common Aspects of Education in the East Asian Classical World、Workshop “The Cultural Foundations of the East Asian Classical World: A Program for Graduate Study”、2009年4月17日・4月20日、University of British Columbia (17日)・University of California, Los Angeles (20日)。

〔図書〕(計22件)

①齋藤希史、羽鳥書店、『漢文スタイル』、2010年、291頁。

②神野志隆光、東京大学出版会、『変奏される日本書紀』、2009年、334頁。

③村瀬憲夫・身崎壽・神野志隆光・内田賢徳・他21名、新典社、『万葉集の今を考える』、2009年、11-70頁。

〔その他〕

ホームページ

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/eastasia/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神野志 隆光 (KOHNOSHI TAKAMITSU)

東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授

研究者番号：60018900

(2) 研究分担者

齋藤 希史 (SAITO MARESHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：82235077

徳盛 誠 (TOKUMORI MAKOTO)

東京大学・大学院総合文化研究科・講師

研究者番号：00272469

内田 賢徳 (UCHIDA MASANORI)

京都大学・大学院人間・環境学研究所・教

授

研究者番号：90122142

身崎 壽 (MISAKI HISASHI)

北海道大学・大学院・文学研究科・教授

研究者番号：90104124

(H19→H21)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：